

内科・糖尿病内科

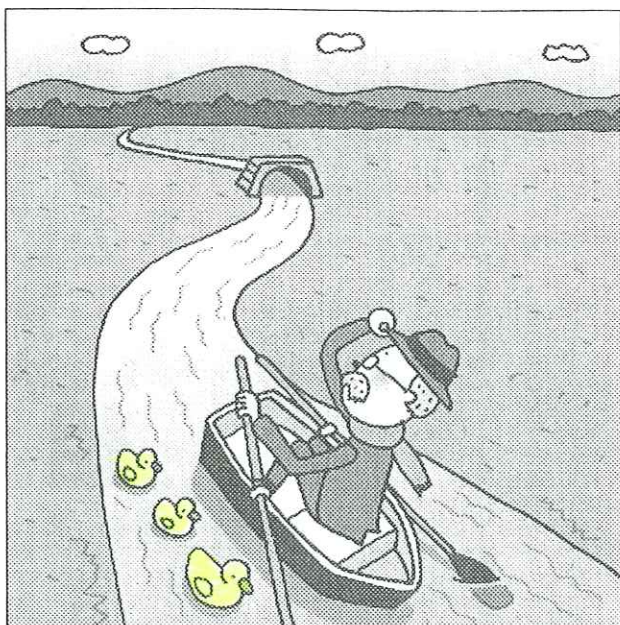
担当医師 井口昭久教授

の記事が掲載されました。

2月20日 朝日新聞 朝刊（毎月1回掲載中）

老年学

記憶流される悲哀



The Asahi Shimbun

「もしあなたが認知症になったとして、子供と夫の名前、どちらを先に忘れたいと思いますか？」と訊く。多くの妻は「夫」と答える。子供の名前は忘れたくない、夫はいい、という気持ちは分かる。だがそれは願望であって、認知症の患者の方も古いお付き合いの人ほど記憶に残っている。地下鉄の駅で例えれば、下りた駅の名前から忘れてゆき、最後まで覚えているのは乗車した駅である。しかし不思議なことに、私たち

愛知淑徳大学教授
医師

井口 昭久

の記憶はビデオの逆戻しのように再生されない。例えばスーパーで野菜を買った場面では、レジから棚に行って野菜を戻すというようにには思い出さない。

人の記憶は、時の流れの様々な場面へ連れていってくれるが、出来事を再生する時には経験した順序通りに思い起こすことしかできない。私の記憶は野菜を棚から取り出した時に戻り、そこから「再生」される。毎日の出来事は川の流れのように後ろへ過ぎ去ってゆく。しかし思い出は川をさかのぼるボートのように思い出すことはできない。過ぎ去った数々の事象に比べて、記憶に残るものは川にかかる橋の数ほどに少ない。

記憶はなぜ逆方向には再生されないのか。思うに、記憶が川をさかのぼるように再生されれば、今の自分にたどりつかないからではないだろうか。また認知症の患者さんの悲しさはボートが下流へ流されていってしまうことである。